

リレーエッセイ・
海外派遣
専門家たよりはかまだしげき
袴田茂樹
青山学院大学
国際政治経済学部教授村上春樹と
「おしん」ロシアとウズベキスタンの
比較文化論

今年5月下旬から7月末まで、国際交流基金（ジャパンファウンデーション）の派遣でロシアとウズベキスタンに滞在した。モスクワ大学および世界経済外交大学（タシケント）の客員教授という資格で、ロシア人とウズベク人の日本理解を深めるというのが基本的な任務である。ここでは、両国における日本理解の違いについて述べたい。

ロシアでは今、ある意味で日

モスクワの書店内の「ムラカミ」棚。村上春樹の『羊をめぐる冒険』『ねじまき鳥クロニクル』『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』などが並んでいる。同じところに村上龍の『限りなく透明に近いブルー』『コインロッカー・ベイビーズ』も

本文化ブームだ。村上春樹がベストセラーとなり、モスクワでは彼の本がどの書店でも特等席に並べられている。村上龍、三島由紀夫、吉本ばなななどの作品も並んでいる。北野武監督の映画もDVDでたくさん出回っている。またモスクワは高級食としての寿司ブームで、日本レストランや寿司バーは300以上とも聞く。いまや寿司レストランに通うというのが、ロシアのニューリッチのステイタスなのだ。といっても、必ずしもロシア人が日本や日本文化を意識して、特別の関心を向けているというわけでもない。

一方、ウズベキスタンでは村上春樹や村上龍は一般にはまったく知られていない。寿司レストランも首都タシケントに怪しげなのが1、2軒あるだけ。つまり日本食も、一般のウズベク人にはなじみのない世界だ。しかし、ウズベク国民は「おしん」には夢中になった。中央テレビでこの連続ドラマが放映されたからだ。地方都市に行っても、

私が日本人とわかると多くの人が「『おしん』はすばらしかった」「毎日泣きながら見たよ」と話しかけてくる。明治以後の日本の近代化は、新興国家ウズベキスタンでは国づくりのお手本と見られている。したがってウズベキスタンはたいへんな親日国でもある。日本における近代化の成功と「おしん」の精神が結びつけられて理解されているのだ。

村上春樹と「おしん」を比較しながら、ロシアとウズベキスタンの日本認識を考えてみたい。

村上氏は欧米でも人気の作家だ。というよりも、欧米の現代的なセンスを凝縮した作家といつてよいかもしれない。ジャズやしゃれた現代音楽、朝食のコーヒー、そして個人の感性がすべての世界。ここでは、国家建設を大真面目に論ずるといっては野暮だ。村上の世界は脱工業化あるいはポスト・モダンの社会である。つまり、物質的に豊かで文化的にも成熟しており、



はかまだ しげき●青山学院大学国際政治経済学部教授／1944年広島県生まれ。東京大学文学部卒、モスクワ国立大学大学院ソビエト社会論修了、同大学院法学政治学研究所博士課程修了、東京大学大学院国際関係論博士課程修了。81年芦屋大学教授、青山学院大学政治経済学部助教授を経て87年現職。87年『深層の社会主義』でサントリー学芸賞受賞。著書に『ソビエト70年目の反乱』『もっと知りたいソ連』など



個人のセンスだけがリアリティをもっている。ロシアでは、あの程度豊かになった個人主義の若い人々が、欧米の最先端としてのこのセンスに惹かれているのだ。村上が日本人であることはまったく関係ない。

同じロシア人でも、1970年代に芥川龍之介や安部公房を夢中で読んだ世代は、村上は不真面目で軽すぎて、芸術的な深みがないという。逆に、いまのロシアの若い世代にとつて、芥川の純粋芸術はあまりにも真面目ですこし重すぎる。つまり、村上は軽さを特徴とする現代精神そのものであり、ロシアにはそれを面白がる層が生まれているということである。

村上が発展途上国でうけないのも当然だ。途上国にとつて村上が象徴する精神世界は退廃であり贅沢であつて、国家建設の立場からすれば百害あつて一利なしだからである。もっとも、一部の社会層が急速に欧米化している中国では、村上が読まれているとも聞く。もちろん、若い

都市住民に限られるだろうが。

ウズベキスタンの日本文学研究者と、村上について話し合ったことがある。この国で村上を読んでいるのは日本研究者くらいだ。ある人は、個人的には面白いと思うが、ウズベキスタンは村上を受け入れるほど成熟していないと述べた。他の一人は、村上文学は退廃的な個人主義の作品であり、まったく評価できないと酷評した。

「おしん」の世界が象徴しているのは忍耐、勤勉、質実剛健の精神である。明治から昭和の初めにかけての日本人が、貧困のどん底にありながらも、ひたすら勤勉と忍耐、誠実さによつて

豊かな生活を築いてゆく。まさに、真面目を絵に描いたような世界だ。ウズベキスタンだけでなく、多くの発展途上国で「おしん」が大評判になったのも、不思議ではない。途上国においては、まさにそのような精神が最も求められているからだ。今

の私には村上を面白がる気持ちがある。しかし私が途上国の指導者だとしたら、やはり国民に「おしん」を推奨しただろう。「ロシアでは「おしん」は放映されていない。たとえ放映されたとしても、多くのロシア人は、ソ連時代の啓蒙的な映画を思い出して拒絶反応を示すだろう。脱工業化社会の先進国で「おし

ん」がほとんど受け入れられないのも、社会の求めるものが異なるからである。

結局、村上春樹と「おしん」は、脱工業化の度合いを測るリトマス紙といえるかもしれない。この点で面白いのはカザフスタンである。カザフスタンにはロシア人が多く住んでいるし、文化的にもロシアとウズベキスタンの中間に位置する。昨年カザフスタンの知識人と話をしたが、村上春樹への反応もちょうど中間であつた。村上もある程度は読まれており、知識人のなかには評価する者がかなりいるが、この国にはロシアにおけるほどの村上ブームは存在しない。●



上から、村上春樹、三島由紀夫、吉本ばなな作品のロシア語版